

昭和二十年

(九十二)

合掌 南無阿弥陀仏

貴翰拝誦仕候、御健祥の為奉慶賀候。第一に村長問題円満解決の運びと相成候こと大賀の事に奉存候。小生迄胸中の安まるを覚え候、引続いての御敢闘奉謝候。此の問題解決致し候えば東野村は発展すべく戦時増産の果逐の上にも誠に喜ばしきこと、奉存候。事件円満解決の上は機を失わず両派の多年の積弊を破摧し各々懺悔改俊せしめて打つて一丸となして御奉公専一にむかわしむること何より御座候。猶これは仰せの如く遠くこれが源をたづぬれば念仏の賜に御座候間、いよいよ功をほこらず謙讓の徳に終始被成度、唯一道精進途上の一事実として更に更に彼岸にむかつて招喚のまにまに尋道直進仕ることこそ肝要に奉存候。猶先般は御芳志有難く奉存候。鶴枝さんにもよろしく御伝え下され度候。

いよいよ年末を迎え申候、よき年御迎え被遊度く本部にも皆々無事有難き年末年始の大行事を迎え候ことに御座候。敬具

師走三十日 夜晃

蘇晃御中

追伸、師範学校の生徒課長二十八日に聞法精進始めとして来団。校長もいづれ来られ候よう承り候。細川君を通しての大悲伝普化の具体相、光明普照の御徳は人智を超えて広大に御座候。

大晦日元旦の行事は御存知のことと存候。教育部会が駄目なれば御正忌には必ず御便り相成度く候。藤原正義は御召、一日入除の由に候、今日は紙尽きて候間充分つくさず念仏のみ大事に御座候。

(前文と同対)

合掌 十二月三十日に認めたる手紙出したとおもいて未だ出さずに有之候、依而本日差出し候。本部にては一同無事有難き正月をむかえ教育部会も盛会にて終了仕り候。御正忌には御便の御ことと存居候。若、應召、十日佐賀に通信兵として入隊候。三日夜本部にかえり四日出発仕り候。有難き極みの壮行式挙行候。石州さびしく相成同胞一同力を落居候。平田屋おぼ、藤枝さん等本部に居り候、十日は山の報恩講これよりゆく処に候。鶴枝さんによろしく。子供らにもよろしく。

昭和二十年一月十日

(九十三)

合掌 その後如何しましたか、正月には帰つて来られるかと待っていました。大晦日には学生諸君皆帰つて来て誠に有難い年をとりました。教育部会も無事、御正忌は

百名を越える盛会ですみました。その間、色々と有難いことを沢山拝みました。十二月三十日には藤原君が為の壮行式、一日松山に入隊しました。体が悪いのではないかと心配しています。御母上によりしく御伝え下さい。

昭和二十年一月十九日

中村正様

夜晃

(九十四)

合掌 雪の中にとじこめられているとのこと、雪と聞くとなつかしい。大雪の中で育った私は、雪を見ると故郷を憶い、聖人を念う。

風邪にかゝったとのこと、御困りでしたらう。本部では二十八日母が脳溢血をやつて右半身不随、床の人となつた。それからの本部は静まりかえっています。今のところ生命に別状はなかるべく御心配下さるな。

二十七日の土曜講座、矢野の精進ぶり、その感想には皆まいつてしまった。「この前の土曜に頂いた善悪を超えて念仏申せの仰せを一週間命がけで生きました。私のうちには念仏が炎と燃えて寒ささえ感じない気がする。何故それだけ働くのか、働かずにはいられないから……」と云つた調子。この男、末おそるべし。

何とこの男の希望の多い男なる哉。時なる哉。この時を人生の危期と考えられた2し。人には希望があり現実がある。その現実が何ものにも拘束されていない時、いよいよ無明は様々な幻を描く。そのうち現実が具体化の一步をふみ出す時、その現実が希望を限定する。結婚する、子供が連綿として出来る。年はとる、今更転職も出来ず灰色のまゝで一生が過ぎる、多くの人がそれであろう。二十七歳、夢幻の境に遊ぶ特権を保有した時である。しつかり夢見るがよからう。

右するも左するも同じである。右したからいゝのではない。左したからよいのではない。道は左右にあるのではない。だからこそいくらにでも見えるのである。幸福なる不幸である。大学教授にも不幸な人もあり、小学校の先生に幸福な人もある。その位のことは君にもよくわかつているはず。

しかし私は何にも期待せぬ。たった一つ念仏の人になること。それは細川巖が細川巖になること。これほどの大事は外にはない。その上にて何なりと為して御国の御用にたてかし。よくわかつたことゝ。

結婚は人生の大事ならずとおもうべし。又結婚ほどの大事は少なしと思うべし。これについては何も書かざるべし。よくよく御案じ可有。

念仏一つ。念仏一つ。遂に念仏一つ。この人たちの便り、机上に集ひ来りて毎日の如く我れを泣かしむ。世の隘路すべて念仏なきが為なるべし。

御大事にして早く御帰りなさい。

昭和二十年一月三十日

夜晃

(九十五)

合掌 先日たゞの一晚を御来団、誠に嬉しく存じました。御念仏御精進のこと何より有難く存じます。何の学問でも必ず念仏申してすること、もし念仏してその心に受け取ることの出来ない学問は必ず誤謬独断の混入せる学問です。理論には、悟界の論理と迷界の理論とあつて、多くは迷界の理論でしょう。念仏して、静かに受け取り得る学問は、客観性の学にしても自己自身を知らせるでしょう。何よりも念仏の心に受け取ることが大事でしょう。これは私の唯一の学問の態度でした。別れていても、御念仏一つで満足し得るようになりたいものです。旅にいていよいよ御念仏の尊いことが身にしみます。御念仏は淤泥華です。華とは正覚華、淤泥とは煩惱、内観の世界に自己の真相を凝視して手放して御念仏申すこと、それで満たされること。御大切に。

昭和廿年四月廿日

夜晃

松岡五作君

(九十六)

合掌南無阿弥陀仏 御便り有難う御座いました。承りませば菊三君には遂に沖縄において御戦死遊ばしたとのこと、かねてそのことはおもっていましたけれども矢張り驚き入りました。菊三君は皇国に全てを捧げて南の空に散華せられた。あの菊三さんがと思ひ出しては、有難く御念仏しています。一月の御正忌の時には誠にようこそ本部に来て下さったことであります。そういう宿縁のあつたことを嬉しく有難く今になつては一層そのことばかり思われます。私の言うことを少しもさからわずに聞いて御念仏して出てゆかれた、あのかおが目の前にうかびます。ようこそよつて聞いて下さった。「もしかすると親子一生のお別れかも知れぬから、お昼には親子三人、それに私も一緒に食事を頂こう」と家内に言いつけましたが、あれが誠にお別れのお膳でした。しかも、それをこの私の部屋でして頂いたことを嬉しく有難く思います。皆様にとつては悲しい思い出ではあつても又嬉しくおもつて下さることの一つであります。噫、菊三君は御名号を身につけて本願の愛機に乗つてつっこんで行つて下さった。御念仏申さずにはいられません。あの本部の玄関でのお別れの時、暗いところが少しもなく、ニコニコしながら菊三君を見上げていられたおぼ様の御かほも何時も思ひ出せます。かねて陛下の赤子を陛下におかえしなざつていられる尊い覚悟のお母様を知っています。しかし可愛い我が子です。一度恩愛の心にかえるとき誠に悲しみの心をどうすることも出来ぬのが凡夫であります。こうした中に御念仏

が生きて下さるのであります。御念仏の中から菊三ようこそみ国のために働いてくれたと、涙ながらに仰がせていただくことが出来ます。身を粉にして報恩行に生きて下さったのであります。私どももいよいよ御念仏に生きさせて頂きましょう。今や菊三君はみ親のくにまつすぐに本願の飛行機に乗って生きてゆかれました。諸善人俱会一処とお浄土において会わせて頂けます。これからは菊三君こそ父上母上全てをよんでいられます。

先ずはとりあえず御弔意を表し奉る次第であります。同封は些少ですが御霊前へ香華御供え下さいませ。敬具

昭和二十年四月二十六日

夜晃

栗栖門人嫌 おぼ様

(九十七)

合掌 カリエスに腹膜炎に神経痛と一つにてもなかなかなるに、種々併発症とのこと御苦しきことと推察心配致居り候。その後の御容態如何に御座候や。こちらは、絹去月二十日手術、本月十日退院致候も微熱と食欲不振とにて因島にて静養致居、その後少しは良しとのこと、御安心被下度候。「聖教読みの聖教読まずあり、聖教読まずの聖教読みありと云々」の章を昨今頂戴致居候。以下少し心の食、御送り申上候。

我らが教法を聞くは伝統の教えを聞くのである。然るにこの伝統の教えはこれを4受け取るに単なる頭脳を以つてすることが出来る。その時、果して浄土真宗は成立することが出来るであろうか。彼の二河白道において、行者は三定死の行きづまりに於いて(行きづまりとは、無有出離之縁の自覚、即ち今までは己を苦しめるものを外に見た。しかるに、物質が苦しめるに非ずして、物に執着する六識に苦しめられていることを知り、その内的原因、三毒等の煩惱を抜かんとして、かえつて、その底なきを自証する時、二河譬の相は現前するのである。無有出離之縁の自覚に至るのである。)この行きづまりに於いて、はじめて発遣の声を聞くのである。

噫。発遣の教、「汝この道を探ねて行け。必らず死の難無けん。もしとゞまらば即ち死せん。」幾度も読みたまへ、これはこれ即ち、行けとの教命である。唯一なる師の意志表示である。伝統何時しかに消えて、我に聞ゆるものは唯一なる師の教命である。伝統は古く、発遣は新なり。伝統は死物にして、発遣は生きてる我が背後の声である。

本師聖人一生をかたむけつくして、選択本願念仏の教示を述べたまえば、我が聖人「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをかうぶりに信ずる外に別の子細なきなり」と発遣の教に信順したまう。

我が唯一の師は「この上は念仏をとりて信じたてまつらんともすてんともめんぬの御はからいなり」と我らを教権への屈従、盲従、妥協、賛成、反逆等より解放して、自由の天空にあらしめつつ、しかも我らをして信順する外、道無からしめたまうもの、即ち発遣の教ではないか。

発遣の教は実にそのまま念仏の心となるが故に、発遣の教を聞くこと即ち自覚なり。然るに自覚の心は信心なるが故に、この心即ち招喚を聞く心である。発遣即ち招喚、もし発遣の声を聞くかに見えて、発遣即ち招喚にあらずば、発遣ではあり得ない。発遣を聞くこと即ち招喚を聞くに非ざるものは、たとえ万巻の聖教を暗誦し、宗乗学の博士となるとも、名利を先とし、心うつろにして遂に聖教よみの聖教よまずとなる。

真に発遣を聞く者は、発遣それ自身が持つ大否定を受けるものである。即ち、我等は常に伝統の教を以つて直ちに我が心（自覚）とする。妄執の否定である。この故にこの否定、一見伝統それ自身の否定なるが如き、妄執の否定をくぐらざれば、真に発遣の生々しき声に接することは出来ない、

しかるに「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教そらごととなるべからず……云々。」信は古ぼけた伝統を新たに出發せしめ、真実の命の通うたものたらしめるのである。妄執の否定、信の自覚に於いて伝統は新たなるもの、真なるものとなるのである。自ら倒れずして次の駒を倒すこと能わざるが将棋倒しである。自ら伝統を受けて、しかも発遣を聞かぬものは同時に伝統はそこに打ち切られるのである。ここに於いて伝統消えて発遣おこるかに見えたのは然らずして、発遣は伝統の中よりおこつて、真に伝統を生かすものなることが明かに知られる。

病床は悲しけれども、久遠劫来の無有出離之縁の業を諦観して「唯念仏せよ」との発遣を聞くにはいい時である。静かに念仏したまへかし。

秋作校長は目下鳥取市に出張中、中国五県の各都市より一名宛集まつて文部省の連中から聞き、やがて郡内教員に伝講するのである。近頃はよく郡の代表として出るようである。何よりも近頃はよく御法を聞いてくれること、嬉しいことである。近い中には□にゆくと云っている。秋作には聞かれる日が来、君には聞かれない日が来たが同一念仏にかわりはない。私も今少し体がよくなれば参上するであろう。本部の修復は今頃台所の方に移っている。吉見君毎日聞法精進、早朝より夕暮までよく働いてくれる。夏には子供らに帰つて来いと言つてくれ。鶴枝さん、体を大事に、先日は母に有難う。よろしくとのこと。

昭和二十年五月二十八日

蘇晃君

夜晃

(九十八)

合掌 又も病氣をはじめたとのこと、自分ながらはがゆくおもっていることでありましょう。しかし念仏なくして今の様子でしたら如何程愚痴と焦燥の中に行詰つていくことであろう。然るに宿善有難く大悲の光懐に摂取せられ「我及び人生のありのままをじつとみつめて念仏して」いられることは有難いことであります。そして気持は極めて安らかであるとのこと。

呼吸を内にすること、外にいきをはくと愚痴が出ます。内に呼吸する者は感謝と慚愧、有難うございます、相すみません、との二つのいきをはく、かくすれば周囲が助かり、自らが助かつて安らかなることを得るであろう。

一線の勇士の闘魂をおもい、断じて病魔に打ち勝て。一日食事に三時間かけてよくかむこと、御念仏申すこと。

昭和二十年六月六日

夜晃

中村正様

(九十九)

合掌 御便有難う頂戴しました。御無事で結構です。お弟様には大患にかゝられたとのこと。しかし手術によつて一命をとりとめられたとのこと、誠に大賀の至に存じます。よろしく御両親に御喜びをお伝え下さい。せつかく本部に帰りながら、あんな事ですぐ出てゆかなければならなかつた事を残念に思います。しかしそれも仕方のない事です。人間は現実の相に従つてゆくより外に道はない。けれども願です、願、遂に願です。願を生きつゝ自然に現実を受け取つて生きてゆく。その次は誰れにもわからないことです。ただ一すじの願に生きて下さい。何も悲観することはないことです。毎日をしつかりした足どりで念仏一つに生きて下さい。六月の例会もすみましました。岡本敏子はまだ本部にいます。色々なことがあり、色々な人が来て本部はいつもにぎやかです。くれぐれも御念仏一つに生きぬくことです。本部を私を思う度に念仏して下さい。御両親によろしく。さよなら。

昭和二十年六月十一日

住岡夜晃

下岡静子様

(一〇〇)

合掌 先日は父上には誠に御苦労でした。その節は又御めづらしき品々御頂き致しまして有難うございました。厚く御礼を御伝えしておいて下さい。坂口君は再度の応召で佐世保にゆきました。おそらくは通訳だろうとのこと。本部のものも未だ第四台目の自動車が来ない、十七日の台風はあまりに大きな仕事をしたので、当分は来ないらしいので、加計まで徒歩で近日ゆくつもりです。その節は加計の林に来なさい。何よりもお体の順調であることは嬉しいことです。心も順調に御念仏申すことです。いよく御念仏より外、生きる道はないことです。皆様によろしく。

昭和二十年九月三十日

夜晃

中村正様

(一〇二)

合掌 先日、お便り有難う御座いました。八月六日、それは、誠に「世紀の大悲劇」のあつた日です。戦争の根さえとめてしまいました。……いよいよ一切が減んで、お念仏のみが残りました。

お念仏に生きさして頂くべき時であります。お念仏の中に一切の重荷を受け取らして頂きましょう。お大事に。

昭和二十年十月二日

住岡夜晃

内観楼様

(一〇一)

合掌 八月十六日附の御手紙が九月二十八日につきました。もう様子もわかっていることとは思いますが、御返事致します。世界中に「広島悲劇」とひびきわたつたあの日、建物は大破しましたが、聖会中のおかげで、一人の負傷者も死者もありませんでした。生きていたら又お会い出来ます。近日中に加計支部に行くつもりです。建物が治る日に又帰つて来ます。

いよく御念仏一つの時になりました。同胞手をとつて御精進下さい。皆様によりしく。

昭和二十年十月二日

住岡夜晃

三浦恒代様

(一〇三)

合掌 南無阿弥陀仏 度々の台風大雨に敗戦の秋はことさらに哀れでありますのに、承れば御一家様には殆んど御病氣なされし上に、弟様をなくせられ、その上に由紀子が亡くなったとのこと、驚入り悲しみ入りました。私らがまだ広島にいた為、それさえ知らず最後を見てやることも出来ず、残念でたまりません。

噫。あの可愛いさかりの由紀はあれまでの寿命でこの世に来たのか。せつかく広島で助かりながら小河内に病魔が待つていようとは何と生生死の苦海であろうか。

花岡君、一人娘に逝かれた悲痛さ御察しすることが出来る、美津子さん、生れてはじめての生木をさかれるような愛別離苦をなめたね。母親は一緒にいて死んでゆきたいほどの悲しみに沈む。由紀子はお前の全てであつたことが無くしてはじめてわかつたであろう。御祖母様は我が子に逝かれ、孫を失い、どんなにか悲痛の御心に御さびしいことでありましょう。由紀子が生前、大きい父ちゃんくと、あまえてくられていた時のことが様々に思い出されて、悲しうてたまりません。一枚の着物、一に手をかけて悲しむ美津子の姿もしのばれます。何という今年であろう。み国にとつて未曾有の年は我等にとつても又五十一歳、かつてない悪い年であつた。一人の人を失うさえその年は苦の年と言うに、母の病、佐々木君の変死、叔父の病死、今又由紀の急逝、原子爆弾を中にして諸行無常、生死の苦海、世間虚仮、五濁悪世、無明流転、あらゆるみ言の真実をいやが上にも知らされて、唯念仏のみの真実を知らされたことでもあります。

こうした苦しみに遇つても、しかし、お念仏が皆様の上に生きていることをおもう時、わづかに慰むことが出来ます。

花岡君も美津子も今頃は誠に本願大悲真実に、より深く徹入していてくれることではありません。どうかお念仏の中に、今更の如く、由紀子の全てを受け取り受け取つてふかまらして頂かう、そのみが由紀子に犬死をさせない道である、平素我らは懈怠であります。その懈怠な私にひどい鞭を入れてくれました。

由紀よ、由紀よ、有難う。大きい父ちゃんが由紀をおもつて念仏する時、念仏の心の中に由紀はそのまゝ生きています。もう紙がなくなりました、それで結ばねばならぬ。一体すぐ飛んでゆきたいが、花岡君を加計にやつたので、女ばかりでは出してくれない。手がすぎ次第、お悔みに上りたいとおもうが、お悔みにも何にもならぬ出まかせのこの文をお送りして、せめてもの私の心の慰めともし、お三人の御念仏の縁にもと筆をとりました。同封は些少ながら霊前にお供え下さい。先はお悔みまで。あなかしこく。

昭和二十年十月三日

夜晃

花岡御一統様

追伸一、加計にはまだゆかずにあります。九月十日に母らを送つて一週間後にトラツクに来てくれるようにと約束していたのに、十七日にあの台風です。その夜の物すごかつたこと。しかしその前にどうも建物が不安なので例の柱の上部の板をはいだところ、補設工作が横木を少しも持つていないので、庭根のがつしようの全ては二本の柱にもたれているのです。

(次の如く) 固解説明 (略)

そこで別に外から礎石をすえて、五木ばかり横木を支える柱を入れておきましたので、倒壊をまぬがれました。屋根は再び大損ねしましたので、嶺をたたむだけでも二日半はかゝりました。人にたのめば朝せんの人でも一日が五十円、職人だと何千円です。それら後始末がやつとついても自動車も電車も通わぬ、橋は大概落ちました。歩



いて、花岡泊りで加計に行こうとしていると、鴨井さんが足に傷をして化膿し、絹が盲腸再発。そうしているところへ秋作が帰って来て、加計には「なぜ早く加計に来ないのだろう」と言っているところのこと。その時「真実の宗家なら、この際、田舎に逃避しないで、迷える人心を救うべきではないか、建物が不安であったのに、あの台風にも倒れないのだから、それが理由にはならない。」と説かれ、私の心は急転しました。そして一人の母を旅の空で死なせることをおもうとたまらなくなり、あの母の好きな部屋で養生させねば、私の子としての心が納まらなくなりました。

そこへ一昨日、天満の堀川校長（友人）が来て、今開校せねば学校が自然消滅になるから、救うとおもうて二階をかしてくれ、このままでは使えないと言うと、それは市で修繕させるからとのこと。「友人の家が立派になるのは、自分の家が立派になるようなものだ」と言つて帰った。が、とても今のところでは修繕すれば何万円仕事です。あまりに話がうますぎるが・・・。

その翌日、松中さんが古江の駐在所へゆくと、巡査が熊野の人で、「住岡先生が田舎へ疎開されるという心持ちもわかるが、今の様な時に先生のような方が第一線に立つて人を救うて下さるのがほんとうではないか」と伝えてくれとのこと。

それで加計にはゆかず、こちらでがんばることにきめました。その為、花田君を加計にやつたのです。加計の方には騒動かけてすまぬが、以上の通りです。

正法学園の連中も相ついでここに訪ねて来るようだが、出て来ませんか。それでは、何処へでも講演に出かけて、再び元の大衆運動にかえりたい。出来れば雑誌もすぐ出したいとおもいます。たとひ一頁でも二頁でも。道ゆく人にでも。切に御援助を乞ふ。

とても小河内までは歩けないので、交通が修復したら御見舞に上ります。いづれ小河内でも講習会を開いたら如何でしょうか。

（この便り何日もく書いたのです。御許し下さい）

七日朝 昨日花田君を加計にやつたところが大変で、何がなんでも全員すぐに加計に来いとのこと。母が大変待つていて、花田君はそのまま帰って来ました。で明日は私が加計に行こうと思つています。一度は加計に入らねばおさまりません。あわててしたことはやはり駄目です。ごたごたで当分小河内にゆけますまい。お許し下さい。

### 三伸（十二日）

本年は度々台風大雨の来る年です。被害が御地方にもあつたことでしょう。

花田君を加計にやりましたが、ここまで運んでは広島に止まることか許されません。加計に行かうとすれば毎日雨か嵐かです。今日はよいお天気です、明十月十三日加計に入る決心です。

草津では為替を切つてくれません。それで一先ず御悔状のみ差し出します。不便な時です。

皆様の御健康は如何ですか。小河内、鈴張には得たいの知れない流行病が盛んだからゆくなど、各方面から聞きますが、未だにおさまりませんか。ではさよなら

昭和二十年十月十二日

兄より

美津子さま

(一〇四)

合掌 南無阿弥陀仏 悲しき御便、確かに受け取り、涙の中に拝読しました。日の一つにつれていよ／＼深い涙のわくことであります。本年は何という受難の年であろう。生死海の現実とはいえ末法五濁の苦逼こゝに極まるをおぼえます。

何よりも彼よりも由紀の死が君の上に宿善開発を迫り、より深く御念仏の世界に出られたことは誠に嬉しく／＼真に有難いことの極みであります。

由紀は決して犬死しなかつた、母の為に彼岸への聖閔を開いて、それによつて真に母の念仏の心の中に直接に生きて来たことは誠に有難く尊く、世間虚仮の唯中に光る唯仏の是真であります。希有の事実であります。凡そ一生の間に宿善開発の契機を与えられて、本願の真実を身を以て体験することは希有最勝、最も／＼難きことでもあります。殆んど人はそれなくしておわることでもあります。然もそれを最愛の由紀によつてなさしめられたところに、言うに云われぬ不思議を感得することではある。事実に於て由紀は美津子の為の最勝の善知識であつた。すでに善知識であつた。昨日までの母は、母ではなく、昨日までの子は子ではなく、両者立場を転じて如来と共なる由紀である。親が子になつて、ようこそと大地にひれ伏す時、ひれ伏した心の中にほのかなる光とともに彼岸への道は開かれてある。ここに宿業開発の一念の信がある。この一念開発の尊さについては人はそれほど思わない。しかし三世に一度あるべきこの一念ほどの尊さが何処にあらう。もし一念開発の為ならば火をもくゞるべし、百千の愛児にも別るべし。凡夫は哀しくも小さき念々の幸福に執着してこの一念の尊さを知らず。

噫。他力本願の大道顕現せず。涅槃の大衆に通ぜずして何の幸ぞ。

君は今最大の不幸に遇うて最大の幸福を獲たる。誠に最愛なる由紀の賜である。不幸と言うべきか、至幸と言うべきか。悲喜一体の至境に南無阿弥陀仏が光つて下さる。

この上は一人残る史記をして念仏の子たらしめたいとの至願も亦嬉しく存じます。何時なりとも私の手元にひき取つて念仏の子として育て上ぐべく、史記亦唯一人の妹に逝かれて子供ながらに由紀のいますみくにに生きんとすること、けなげなことであります。何よりも／＼念仏に徹することこそ、一大事であります。一族春族、皆念仏に徹すべきであります。徹底したかに見えて徹せざるは念仏の儀であります。ことにあつてこのことを痛感しています。

昨今は朝夕、小河内をおもい、満州をおもっています。夫と子とに別れて（きかれて）人生の冷たき曠野に言語に絶する苦悩の中に田鶴は立つてはいまいか、帰り来れ、我が胸に、念仏の園に、汝が傷つき痛み凍えたる胸を温めてやろう。

御念仏の中に宿業の重荷を受けとらして頂かう。皆様によろしく。

昭和二十年十月二十三日 兄より

美津子さま

追伸一、別に花岡君に書きませんがよろしく。何かことがあれば、すぐに来てくれと助けられていながら、由紀の死すら知らずにいたこと誠に申しわけなきことであります。早くゆきたいとおもいますが、長い夏中の労働がこたえたか、体の具合に悪いところがあつて今は歩けません。何卒許して下さい。

秋作が本部に来て色々な様子が明かになりました。兄弟十四人が集ることはむずかしいことです。せめて彼岸においてとねがわずにはいられません。多くの泣いている人にお念仏を知らせることの出来ないことが、深い深い悲しみです。

(一〇五)

合掌 南無阿弥陀仏……(略)

歎異砂の「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば……念仏のみぞまことにておはします」までをピカの日から四十九日迄頂きました。頂き飽かぬことです。静かによく／＼頂いて下さい。「親鸞一人が為なりけり。」ほのかにうなづかせて頂くことが出来るとは何たる幸でありましょう。五濁悪世が誰の身にもせまつて来ます。濁悪邪見の衆生からであるものがありましようか。

和讃に云く

「五濁悪時悪世界 濁悪邪見の衆生には

弥陀の名号あたへてぞ 恒沙の諸仏すすめける。」

五濁の世、何もかもそらごとたわごとのみの中に、御念仏の真実をめぐまれてあることは誠に有難いことであります。私たちには如何なる時にもこの御念仏一つ生きさせて頂かねばと、願の明かにされていることは有難いことであります。

私たちがまだ加計に移らない十月一日(私たちは十三日に来ました)に石州から岡本敏子、河野初代、河野綾子と弱い体の持主ばかりが三人で加計に来たそうです。十六里の道を片道三足の草履をふみ破つて中国山脈の横断は男の足でも大変です。「願」です。信は願であります。願の火の消えたところにはただ概念のみが残ります。この三女性の尊い足跡を如来は必らず証誠護念してそのままにはおきたまわぬであります。御礼のつもりが長くなりました。御大事になさいます。

昭和二十年十月二十四日 夜晃

中務美津代様

(一〇六)

合掌 南無阿弥陀仏 先ず以つて若が無事で帰つて来たこと、何よりも芽出度く御喜び申し上げます。その日を待つていました。もし若が帰つてくれねばどうじゃろうかと、何時もく案じていました。本日は無事帰つたと聞いて、誠にくおどり上るほど嬉しく感じました。正法を聞信する人は少い。まして教家となつて自信教人信することの出来る器は稀有であります。若に命を賜つたこと、誠に有難いことに存じます。母丈よ、誠に御喜び申します。

千代子夫人もよう御念仏で留守をしてくれました。いよくみ教のまゝに精進致しましょう。

若よ、誠にこれから精進しよう。今日日本を救うものは正法だけである。念仏だけである。自由の天地は念仏の華の咲くべきを待つている。いよく精進しよう。

今日潮さんが、十二日に迎えに来てやると云つて下さいました。久々に同胞に会えるところとおもうと生き上る思いがする。それで十二日に、田畑君の内と光善寺と徳泉寺の三ヶ所に御厄介になりたいとおもう。中国山脈を横断して、私のいない加計に来て下さつた三人が光善寺と徳泉寺を選択せしめます。それに田畑君ほど私を待つて下さる人はありません。そこで最初三日間（ついた日は休み）を田橋、次に三日晩を光善寺、その間に仕度や通知をして頂いて、徳泉寺まで五日間ほど小講習会を開いて頂きます。これは昨夏八月の講習のかわりであります。つまり、三ヶ所だけを十二月にすませたいと存じます。若や義坊が命を頂いて帰つた大喜びであります。本部に一人の死者のなかつたことさえ誠に不思議であります。河内など（中務君のところ）三百人の義勇隊が、第一次の合同葬が百九十七柱、第二次が二十六柱、第三次もあるそうです。業次第では遠方の人さへピカドンでやられています。お互いに無事で御会い出来ること不思議であります。

加計では林にゆくことになっていましたが、いざとなると色々困難な事情が添いましたので、次に清水、部屋を借ることになりました。この家は八月六日のピカドンで主人も妻君も広島で死んだのです。清水（清水屋ではない本家）は団員ですし、十中九分九厘お貸しするが、あとの一厘を、百ヶ日が十一月下旬になるとのこと、十一月十五日の百ヶ日と親族会議がすむまで待つてくれとのこと、それまでを東屋にいます。清水の部屋は階下六間、階上一二間と言う立派な瓦葺の家です。十二月の聖会はこの家で開きますから、必ず御出席下さい。加計に来るにしても十一月十五日から後にして下さい。本部は七割破損の認定です。しかし色々補強工作がきいて九月十七日の台風にも倒壊せず、階下は全くそのまま（外側をのぞいて）ですから住むに住まれぬことはないのです。徳永さんを輪番に入れ、鳴井さんを畑の仕事に残しておきました。万々が一、加計にいられなくても困ることはないのです、一同は広島に帰ることを希望しています。八月の下旬からトラックに三台荷物が来ていたので加計に来なければならなくなつたのです。

今や世をあげて暗黒時代を出現し、光を求めています。そこで今力一杯働きかけることが第一であります。今からは私も、一切の条件を撤廃して何処へでも出かけてお話をゆくことに致します。その気で、宗団法は無くなると思いきつて進出して下さい。いよく御念仏のみの時が来ました。一切の武器をすてたら、後に残るものは信

力のみです。話は山ほどあるが会った時に残します。早く会いたいものです。では  
お大事に、風邪をひかないように。

昭和二十年十月二十八日 十一月二十日出 夜晃

光善寺皆様